

## 第 18 回木曾三川下流域自然再生検討会議事概要

日時：令和 7 年 10 月 10 日(金)10：00～12：00

場所：木曾川下流河川事務所 1 階会議室および WEB 会議室

1. 開会
2. 開会挨拶（木曾川下流河川事務所長）
3. 座長挨拶（藤田座長）
4. 委員の紹介（事務局）
5. 議事
  - 1) 自然再生計画書の変更について

- ・事務局から、資料 1-1「第 17 回自然再生検討会における主なご意見と対応方針」、資料 1-2「自然再生計画書（変更案）変更点の概要」及び資料 1-3「自然再生計画書（変更案）」を用い、また、付録資料 1-1「令和 7 年度事前ヒアリングにおける主なご意見と対応方針」及び付録資料 1-2「自然再生実施箇所の検討に関する詳細資料」の該当箇所を参照しながら説明があり、以下の質疑内容を踏まえて検討を行い、自然再生計画書（変更案）の原文等に適切適正な修正や補足説明等を加えることで了承された。

### 質疑の概要

- ・自然再生計画書（変更案）変更点の概要 P15 の横断図を確認すると、現状、浅場が形成された範囲及び今後の浅場の整備範囲の面積が非常に限定的に感じる。ワンド再生箇所などの他の整備箇所ではどのような形成状況になっているか。
- 他の整備箇所についても干潟の形成が進んでいる箇所もあれば一部水制間で形成されていない箇所も確認された。整備箇所のモニタリングについては今後三次元点群測量(定期横断測量)の活用を想定している。【事務局】
- ・木曾三川は伊勢湾に対して非常に貢献度がある大河川のため、気候変動を踏まえた形で、木曾三川が伊勢湾に及ぼす影響というのを視野に入れて整理を進めて欲しい。
  - ・木曾三川の自然再生に関する特徴がもう少し明瞭化すると良い。具体的には、浅場の考え方として、揖斐川及び木曾川は動的なエコトーンが今も認められる一方で、長良川に関してはどちらかという静的なエコトーンという整理になるため、そうした違いが、より明瞭になれば良いと考える。
  - ・長良川における、良好な湛水環境について生物面の方からもしっかりと目指すべき姿が位置づけられた方が良い。検討する際には、長良川河口堰上流における供用後 30 年を経た湛水生態系の現状と堰運用との関係も視野に入れてほしい。
  - ・自然再生計画書（変更案）変更点の概要 P5 の自然再生の区分けの仕方について、干潟の中に浅場という整理をしているが、干潟再生とは別立てで浅場環境の再生が非常に重要という位置づけにすることが重要だと考える。またヨシ原再生についても支流の存在をもう少し頭出ししても良いかと考える。一定の定義をもって創出面積や箇所数の定量化を目指す考えについては理解をしたので、今後これらの位置づけのブラッシュアップを図ってほしい。
- 浅場の整備は本計画書の改定を以て初めて定義したので、その位置づけについては今後も検討を進めていきたいと考える。また支流の整備の位置づけについても引き続き検討を進めていきたい。【事務局】

- ・設定した創出面積及び創出箇所数の、過去からの変遷状況を整理した方が良い。過去から現在までの変化を整理し、整備により増やす面積やもたらす変化の整理を図示できると、現状の増減傾向と将来的な方向性が見えてくると考える。具体例として、計画書変更案 P15 で干潟やヨシ原面積の推移が示されているが、今後これらをどのようにしていくかが合わせて図示できると良いと考える。

- ・干潟・浅場の整備予定箇所のうち P15 の立田は浅場ができていない一方で、他の整備箇所はある程度浅場が形成できていると感じた。要因として、養浜していないことも挙げられるか。

→養浜は実施している。先ほどの指摘のとおり、水制の前の地形が影響していることも考えられる。整備後のモニタリングの中で再生が難しいことがあれば、見直しを行う想定である。現状の定量目標も水制間での算出という形で今整理しているが、今後の測量結果等をふまえ、検討したい。【事務局】

- ・面積ベースでの目標値の整理を行っているが、体積ベースの整理も必要と考える。どのような土砂を投入するかという点で、水制付近の水流と合わせて粒度組成も大切である。

→目標値の設定においては、水中の状況次第で変わりやすいという点で体積ベースの目標値を示すことが難しい状況であり、面積ベースとしていた。土砂量は参考で算出することは可能と考える。整備後のモニタリングの中で養浜量は確認していくので、測量成果と合わせてモニタリング結果の報告ができればと考える。【事務局】

## 2) 令和7年度のモニタリング評価結果及び令和8年度モニタリング計画

- ・事務局から、資料2「令和7年度のモニタリング評価結果及び令和8年度モニタリング計画」を用い、また、付録資料2「令和7年度 自然再生箇所別の調査結果」の該当箇所を参照しながら説明があり、以下の質疑内容を踏まえて検討を行い、計画案に適切適正な修正や補足説明等を加えることで了承された。

### 質疑の概要

- ・干潟の形成状況の評価は、現状まだ干潟長で行っているのか。三次元点群データは全ての水制間で取得されているのか。過去のデータとの比較は可能か。

→現状は干潟長で評価を行っている。令和3~4年に行われた定期横断測量で、揖斐川全ての水制間で三次元点群データは取得されている。しかし、令和4年より以前の三次元点群データが存在せず、比較できないため、干潟面積での評価は次回の定期横断測量実施後行う予定としている。【事務局】

- ・対照地区についても、どのように変化しているかを注視していく必要がある。長良川の対照地区でオオヨシキリは確認されているのか。オオヨシキリの生息に、一頭あたりどの程度ヨシ原面積が必要か過去の調査から分かっているか、評価しやすいように思う。

→対照地区におけるオオヨシキリの確認状況は確認して、回答する。また、対照地区の状況変化も今後、注視していく。【事務局】

- ・ワンド再生地区について、評価項目の指標は検討されているか。分類群によって種数での評価や個体数での評価等の複数の指標が使われているが、体系的にどの環境であれば何を指標に評価するかの内容は決まっているか。整備効果の有無を第三者から問われた際に、何を評価軸としているかが不明瞭だと感じたため、明確化した方が良い。また、D0は季節によって値のレンジが異なるため、飽和度で示すことも含め検討すると良い。

- ・ワンド再生地区の調査で地表徘徊性昆虫が少なくなったとあるが、種数が少なくなったとしても、栄養段階の評価は入れて欲しい。昆虫であれば、雑食性、草食性、腐食性、肉食性といった評価を行い、種数が減ったものの栄養段階が肉食性まで進んだ等の評価軸の検討を行うと良い。また、トンボ類は、止水性、流水性といった生息環境の違いから環境変化を評価する等の手法も含め、検討いただきたい。なお、地表徘徊性昆虫は、日によってかなり捕獲数が異なる場合があり、トラップの中に落ちた虫の種類によっては共食いをして、種類が少なくなってしまう場合もあるので注意が必要。

→ワンド再生地区では試験施工を行っており、現段階では定量的な評価指標を具体的に定めていなかった。しかし、令和3、4年度に事前調査を行い、令和7年度までで整備後3年の短期モニタリングの調査結果が得られたため、整備コンセプトに対しての効果の有無も含めて調査結果を精査し、定量的な評価項目や指標を次回検討会までに整理したいと考える。【事務局】

- ・ 定量評価は今後の重要な課題であるため、工夫し、検討すること。

### 3) ワンド再生箇所 22.0km～22.6km における整備方針

- ・ 資料3「ワンド再生箇所 22.0～22.6kp における整備内容」について事務局から説明があり、了承された。

#### 意見の概要

- ・ 現状繁茂している樹林は、参考資料に掲載されている1974年～1978年の航空写真の状況になる計画ということで了解した。

## 6. 閉会